



《ご案内》

■企画展「台地讃頌―遺跡の立地から見る根郷の歴史―」開催中

当センター考古資料展示室にて、平成24年6月29日(金)まで企画展を開催しています。

今回は、センターの移転を契機に、移転先の根郷地区が含まれる台地の旧石器時代から近世までの遺跡を取り上げ、台地利用の変遷を主眼に置いた展示をしています。



《NEWS》

■岩屋古墳現地説明会を開催

今回紙面でも紹介している岩屋古墳において、平成23年11月20日(日)に現地説明会を行いました。天気にも恵まれ、総勢400名もの来場者がありました。



《速報》

■富里市郷辺田遺跡

平成23年7月～10月にかけて発掘調査が行なわれた富里市郷辺田遺跡は、高崎川を臨む標高約32～38mの台地上に立地しています。調査の結果、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などで構成された奈良・平安時代の集落跡が見つかりました。竪穴住居跡内からは焼土が検出されることが多く、中でも9号住

居跡からは多数の炭化材が発見され、焼失住居と考えられます。

また、台地の中央からは近世の野馬土手と、それを挟むように2条の溝跡が見つっています。江戸時代の富里市には馬を飼育するための牧が置かれており、これらの野馬土手や溝跡も牧に伴うものと考えられます。

郷辺田遺跡の周辺には新橋高松遺跡、寺沢遺跡、駒詰遺跡、尾上木見津遺跡、中ノ台遺跡などの9世紀前半に営まれた集落が多く、本遺跡も同時期の集落の一つになります。



郷辺田遺跡9号住居跡炭化材検出状況

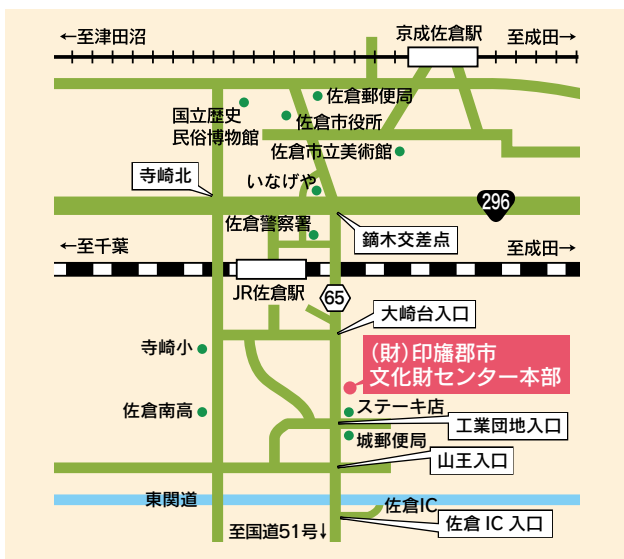
《室内作業》

〈本部統合事務所〉

佐倉市春路1-1-4 TEL. 043-484-0126 (代)
駒詰遺跡第2地点(富里市 古墳～平安時代・近世)
尾上木見津遺跡第2・3地点(酒々井町 古墳～平安時代・近世)
郷辺田遺跡(富里市 奈良・平安時代・近世)
前原No.2遺跡H・I区(四街道市 縄文・奈良・平安時代)

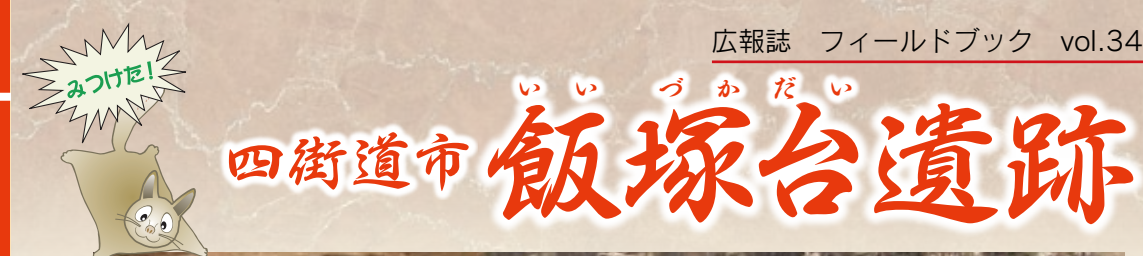
《おしらせ》

※上記の発掘現場、室内作業は見学できます。ご期待に添えない場合もありますので、かならず、事前にご連絡ください。詳細は本部へお問い合わせを！



発行・編集 財団法人 印旛郡市文化財センター 〒285-0814 千葉県佐倉市春路1-1-4 ☎043(484)0126(代) FAX043(485)9871 平成24年3月16日
http://www.inba.or.jp (ホームページ) http://www.inba.or.jp/l/

FIELD BOOK

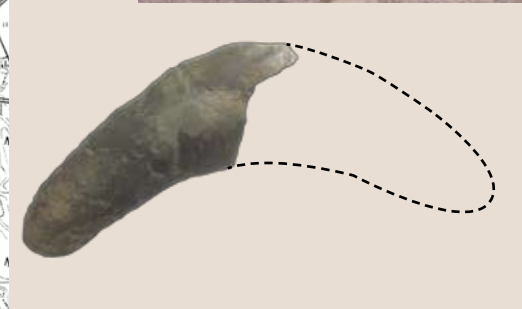


柄鏡形住居(手前が出入口)

土器片囲い炉(土器の外面を炉の内側に向けて並べている)



遺跡位置図(四街道市立旭中学校の対岸)



西日本型独鈷石(推定長21cm)

飯塚台遺跡は四街道市の東部、鹿島川の支流である小名木川によって開析された標高30mの台地上に立地しています。発掘調査は、平成22年の4月から6月にかけて約1,900㎡について実施しました。その結果、縄文時代後期前半(今からおよそ4千年前)の竪穴住居跡28軒をはじめ、多数の貯蔵穴や墓穴とみられる土坑が展開する大規模な集落であることがわかりました。これらの遺構の多くは複雑に重複していたことから、比較的短期間のうちに繰り返し住居が構築されたと考えられます。

この時期の住居には、「柄鏡形住居」と呼ばれる平面形が柄鏡のような形をしたものがあり、円形の居住空間にハの字状の出入口施設が付きます。写真の住居の規模は、居住空間が径6.5m、出入口施設を含めた長軸が6.7mほどです。床には壁に沿って柱穴が廻り、中央からやや出入口に寄った位置に、深鉢の破片を径1.4mほどの円形に配置した「土器片囲い炉」と呼ばれる炉が設けられています。出土した遺物は、大量の土器のほか打製や磨製の石斧、石鏃といった石器もあります。なかでも、用途は不明ですが、「西日本型独鈷石」と呼ばれる石器の破片が県内で初めて出土しました。このほか、現在の東京湾から直線距離で10kmほど離れた位置にあってハマグリやキサゴ、ヤマトシジミ、カキなどの貝類が土坑から出土していることは、当時の食料獲得行動の一端を知る上で注目されます。

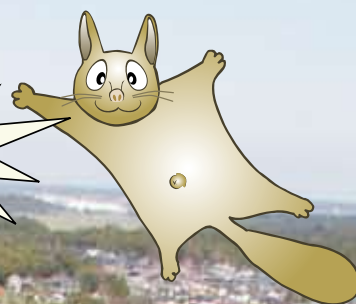
これまで、鹿島川中流域においては同時期の中心的な集落の存在が知られていなかったことから、今後は同じ水系に分布する宮内井戸作遺跡、千代田遺跡(八木原貝塚)といった遺跡との関係に興味がもたれます。

国指定史跡

いわや

栄町岩屋古墳

わかった!



岩屋古墳(龍角寺105号墳)は、印旛沼の東岸2km、印旛郡栄町龍角寺字池下に所在しています。標高30m程の細尾根の台地上に展開する龍角寺古墳群の南端に築造されており、昭和16年に国指定史跡に登録されました。

本古墳は一边78m、高さ13.2mを測る非常に大型の方墳であり、規模は7世紀(古墳時代終末期)につくられたものとしては全国で最大です。墳丘は三段築成をとり、東・西・北側には周堤帯が巡ります。南側は前庭部からすぐに崖線となり、崖線部には舌状張出地形と呼ばれる斜面地形が確認されています。墳丘南側には東西2室の石室が開口しており、どちらも単室構造の切石積横穴式石室が採用されています。石室は木下貝層で採取される貝化石を含む軟質砂岩を主体としますが、天井石の一部に雲母片岩(筑波山系片岩)が使用されています。古墳の築造年代については、6世紀末～7世紀初頭に築造された浅間山古墳に後続すると考えられており、7世紀前半～中頃と推定されています。

本古墳は過去に墳丘や石室の測量調査が実施されていますが、本格的な発掘調査は行われておらず、今回の調査によってその構造に初めてメスが入られることとなり、その結果、次のようなことがわかりました。

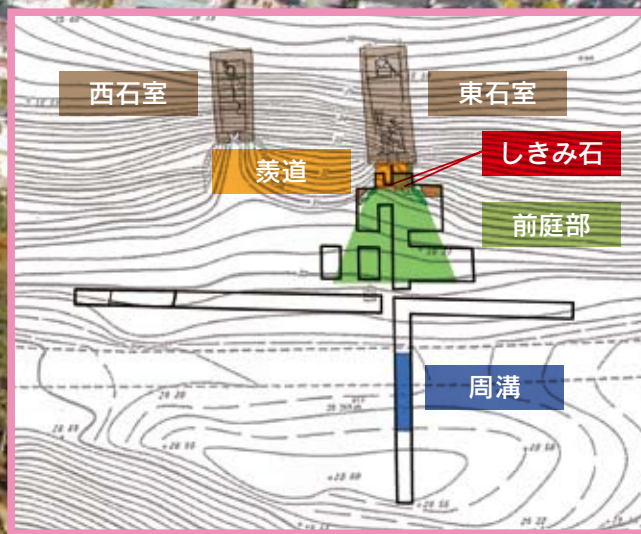
1点目は、周溝の存在と形状です。東石室から垂直に設定したトレンチ内において、周溝が1条確認されました。崖線部までの距離から、周溝は一重と推定され、同時期の古墳に多い二重周溝は、少なくとも南側には築かれなかったと考えられます。

2点目は、石室前方の構造です。石室の前にはしきみ石によって区画された短い羨道部が設けられていたことが確認されたほか、板石をハの字状に配置した前庭部を有していたことがわかりました。いずれも貝化石砂岩ではなく筑波山系の片岩が使用されていました。

古墳の所在する印旛沼東岸域は、利根川・根木名川・江川に囲まれ、古墳時代後期から終末期にかけてつくられた群集墳と呼ばれる古墳の密集地域です。また、北西部には白鳳期(7世紀後半)に創建された龍角寺や、律令制下における埴生郡衙跡と考えられる大畑Ⅰ-Ⅳ遺跡などが所在しており、当地域がその後の時代においても中心的な役割を果たしていたことが確認されています。岩屋古墳は、古墳時代から古代へと大きく社会が変化していく、ちょうど画期にあたる時期につくられた大変重要な古墳だといえるでしょう。



東側石室調査状況



トレンチ配置図



遺跡位置図 (S=1/50,000)